

三浦 雅士 評 (評論家)

ブルデュー『ディスタンクシオン』講義

石井洋二郎著 (藤原書店・2750円)

問題提起の書である。20世紀最後の4半世紀、フランスは2人の顕著な思想家を世界に送り出した。ブルデューとトッドである。前者は社会学者、後者は歴史人口学者。

フランスは20世紀中葉にもサルトルとレヴィーストロースを送り出して、実存主義と構造主義を世界に蔓延させた。ブルデューとトッドは、先輩のサルトル、レヴィーストロースには及ばないと思われがちだが、そうではない。トッドが家族制度の分析を通してソ連崩壊を予見したことは有名だが、ブルデューの代表作『ディスタンクシオン』、直訳すれば「差別」は、生きられた階級の生々しい体験を分析して世界的に注目された。たとえばアメリカで進められていた大統領選挙にしてもその分析対象に入る。

投票集計の状況は不正選挙を疑わせなくもないが、アメリカの主要日刊紙は認めない。選挙は民主主義の

根幹。かりに大勢に影響がないにしても徹底的に調査するのがジャーナリズムの責務。それをしないのはおそらく外国からの圧力などではない。トランプ大統領に対する「ディスタンクシオン」が働いているのだ。高学歴・高収入・高趣味の知識人たち、いわゆるアメリカ東部エスタブ

リッシュメント(官僚や新聞記者もそうだが)にとって、不動産で財を成したトランプは政治家としてかなり異質であり、はじめから毛嫌いの対象だった。トランプはポピュリストであり潜在的なファシストだと貶すことが、この階層にとっての身分証明になった。かくして現実を直視せず、不都合な事実には目をむるようになったのではないかと疑われる。私はアメリカや日本の多くの知識人が「トランプだけは勘弁してほしいね」と吐き捨てるように言うのを

見てきた。「私はそれほど悪趣味ではない」と言っているのだ。「美学上の不寛容は恐るべき暴力性をもっている」(ブルデュー)のである。『ディスタンクシオン』は「趣味と階級」の関係を実証的に分析している。邦訳全2冊合計千頁を超す。『ブルデューディスタンクシオン』講義は、その邦訳者による簡潔な解説読みやすく分かりやすい。原著刊行は1979年、邦訳刊行は90年。邦訳刊行から30年、20刷を数えて普及版刊行となったのに合わせて、半世紀の昔、コーヒーマグの宣伝で「連

と情報の錯綜は、その機能不全をも示す。著者は邦訳刊行直後「差異と欲望」という本格的なブルデュー論を出している。対するに本書は平易だが、原著の章に対応する講のそれぞれにエピソードが付けられているのが目を惹く。導入講義はルソー『人間不平等起源論』からだが、第一講以後は太宰『斜陽』、漱石『彼岸過迄』、谷崎『痴人の愛』、水村美苗『母の遺産 新聞小説』、バルザック『優雅な生活論』、ロラン『ジャン・クリストフ』、ゾラ『居酒屋』と続き、

怒りを何に向けるべきか

いが分かる男の」というキャッチコピーが流行したが、「ディスタンクシオン」とはいわばこの「違い」のことだ。理論を大統領選挙に適用したのは評者であって著者ではないが、そういった応用がいくらでも可能だと思わせる柔軟性がある。人間は差をつけなければ生きていけないし、また同化しなければ生きていけない。住居、衣服、話し方、それらすべてが階級の「ディスタンクシオン」として機能する。

そして第八講がニーチェ『人間的、あまりに人間的』、さらに総括講義があつてそこにはブルデューの『介入』からの一節が引かれている。エピソードは近代小説が「ディスタンクシオン」つまり階級差を主題としてきたことを示す。同時に、それが機能していた時代が過ぎつつあることをも示唆する。小説や映画、アニメといった物語表現の最先端ではいまや通貨も身体も虚構としてしか描かれていない。人は身体を脱ぎ捨て着替える。通貨も労働も尊いも

のではもはやない。弱者は瞬時に強者に変わる。アメリカ大統領選挙にしても、恐ろしいのはその全体がもはや漫画にしか見えないことだ。「クレーン」が「マトリクス」とか、飛び交う語がその良い例。格差社会の究極には、1%が99%の富を支配するという世界的現実がある。だが、「ディスタンクシオン」はすぐれた理論だが、いまやこの1%を可視化することができない。趣味と階級」が変容してしまつたからだ。アメリカのみならず中国においてもまったく同じことが起こっている。いまや反腐敗闘争もまた漫画なのだ。ブルデューはこの事態を予見して階級闘争から分類闘争への道を提示したと、本書の著者は述べる。時代にはしかし加速度がついている。大統領のツイッターは悪趣味に思われたがいまでは最重要事である。「趣味と階級」の変容は要するに趣味の分類の変容。趣味の争いは暴力的だが、つねに個人的問題へと矮小化される。著者は最後の総括講義に「もっと怒りを」という題を付しているが、「怒り」の矛先を何に向けるべきか。見えてくるのはその難しさだ。問題提起の書である理由だ。